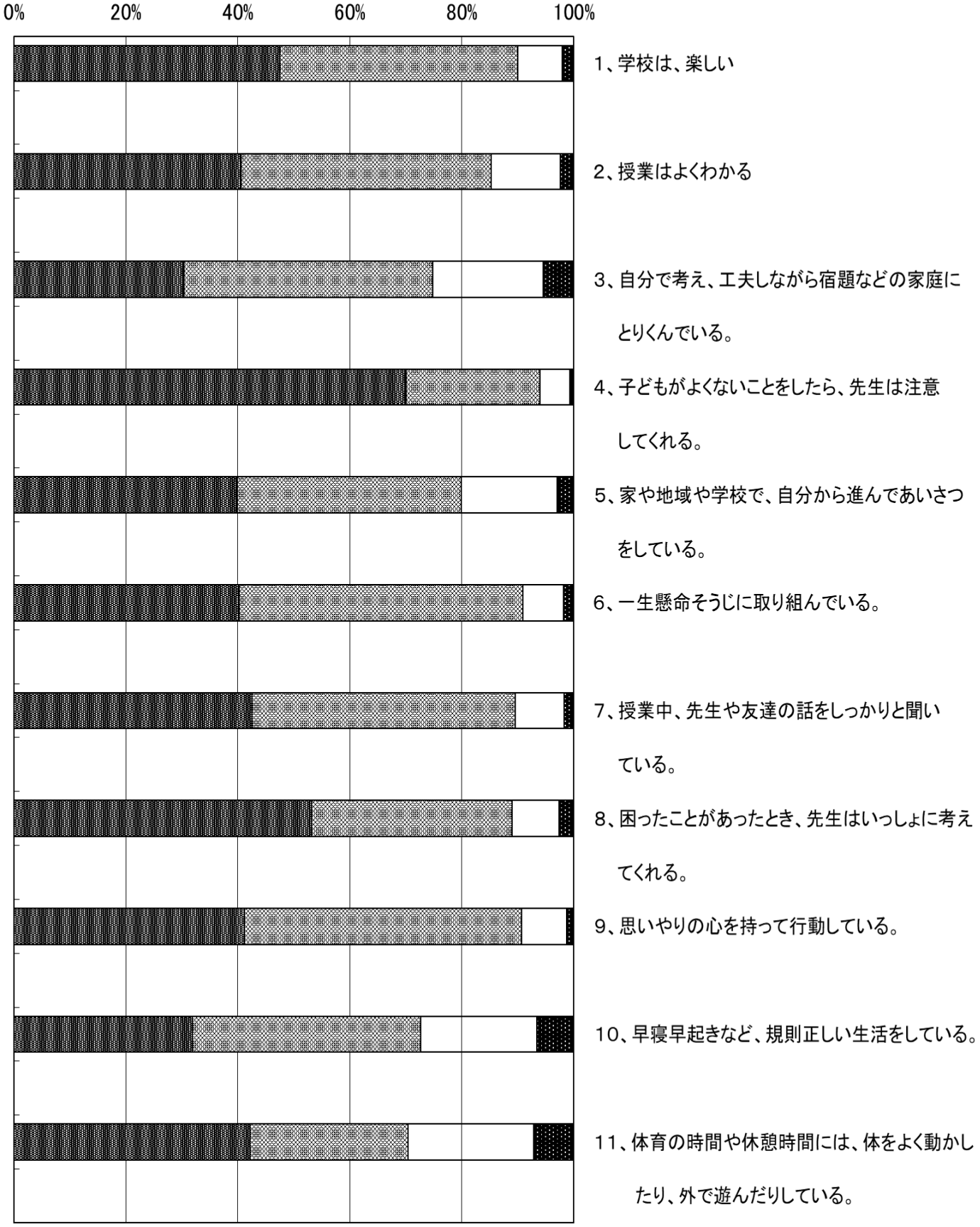
令和6年度 唐崎小学校学校評価書　（実施時期：：自己評価…令和６年１１月　学校関係者評価…令和７年１月）

項目		評価の観点	評価 小項目評価	評価 自己（職員）	評価 学校関係者	項目に関する分析・意見 など ○成果　▲課題　（職員）	提言 ◇学校関係者（地域等）	今後の改善に向けて　◎大切にしたいキーワード　○具体策など
確かな学力と個性を伸ばす教育の推進	主体的・対話的で深い学び	互いに認め合う支持的風土を育てる学級・学年集団づくりに努めた。	A	A	A	○ふりかえりを毎時行うことで、教師も授業を振り返り、次時に活かせた。 ○校内研究が無理なく効果的に計画・実施されている。 ○ペアワークや班活動を積極的に取り組み、子どもたち同士が気軽に話せる授業づくりができた。 ○子どもたちと目標を考えることで、学習への意欲が高まった。 ▲子ども間での交流よりも教師対子どもの関わりが多くなってしまった。 ▲読み解く力についての共通理解が十分にできていない。 ▲自主学習の継続が難しい。	◇互いに認め合う支持的風土を育てる集団づくりに努めていることは好ましい。積み上げが大事であるので、今後も取組を継続しよき伝統としていくように期待したい。 ◇主体的に学習に取り組む態度をはぐくむことはとても大切。「楽しい」「わかった」「できた」と実感できる児童を増やしてほしい。 ◇「聴く力」「認め合う」などは道半ばであり、継続して力を入れてほしい。 ◇ペアで話したり考えを書いたりする際の目的を児童がはっきりわかっていることが大切。	◎「楽しい」「わかった」「できた」と実感できる児童を増やしていきたい。 ◎させるだけでなく、「自主」「自律」へ。学び合って心を育てたい。 ○児童がその時間に何を学習したのかを確認し、学んだことを定着するために、ふりかえりの時間をしっかり確保する。 ○児童が主体的に取り組むために、めあての設定、取り組む課題をはっきりする。主体的に学びたくなる学習課題や、必然性のある対話の場面を設定していく。 ○学期ごとに指導の力点を明らかにし、主体的な学び、対話的で深い学びに適した学習計画を立てる。 ○校内研究の成果を検証するためには、現状から目指す姿をはっきりとイメージしなければいけない。短期間で目指す姿に近づくことは難しく、中・長期的な視点で目指す姿を設定し、学年末にその姿に近づいたのか検証し次年度につなげていく。 ○考察場面ではグループ交流の形態も取り入れているが、自分の考えを持たないまま交流に入る児童が多い。いかに自分の考えを持たせられるか、改善していく。 ○授業研究では、子どもが緊張して普段している授業のようなことができないと感じる。1クラスに見に行くのではなく、ほかの方法も考える。 ○学習習慣の定着を図るための家庭学習の内容と方法の再検討をしていく。 ○学年内で教科担当制を行い、担当が責任を持って教材研究をし、学年で共有していく。
		協働する体験・伝え合う喜び・コミュニケーション能力の育成を図る授業の工夫改善に努めた。	A					
		「めあて」「ふり返り」や学び合いを取り入れた授業づくり、「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」を育む授業計画など、主体的・対話的で深い学びを追究する授業研究や研修会に取り組んだ。	B					
	道徳教育の充実	生命を尊重する心やいじめを許さない態度などの道徳的実践力を育てる活動を工夫した。	A	B	B	○考え、議論する道徳ができるよう、教師からの問いや投げかけの言葉を精選して発問できた。 ○各学級の工夫が感じられ、アンケートの活用や資料の見せ方が良かった。 ○道徳参観を通じて保護者と一緒に道徳心を養うことができた。 ▲子どもの想いや考えを子ども同士で理解し合うことが上手くできなかった。 ▲教材研究や資料整備に時間がかけられていない。 ▲全員発言を目指したが、時間が押してしまい全ての授業で全員発言ができなかった。	◇道徳の参観機会が設けられていて，学校組織として道徳教育の充実を図っている事は評価される。 ◇生命を尊重することの重要性について学校、保護者、地域が連携して取り組むことが今後ますます求められる。 ◇いじめを許さない態度などに関しては定着してきたように感じる。「いいね」数で競ったり、自分が優位に立つための「マウントを取る」など若者の差別につながる事象を教えていけるとよい。	○アナログな教具もよいが、ICTの活用を道徳科でも進めたい。資料の提示や動画などを活用して、さらに心に迫る授業づくりをしたい。 ○子どもの一つの意見をみんなで考えていけるような学習にしていきたい。 ○資料は、イラストがすぐにタブレット端末でうつせるように、夏期休業中に、教材づくりや整理をする時間をつくる。 ○児童の実態から情報モラルを伝える授業を積極的に取り組んでいく。 ○授業の進め方や内容については学年で授業作りについて話し合う機会を増やしていく。 ○人の気持ちを考えることが難しいところがあるので、実際に自分の気持ちに置き換えて対話をしながら道徳教育をする。 ○道徳の授業で作成した教材や指導案などを次年度にも引き継いでいけるように整理する必要がある。 ○道徳の授業を、見せ合える機会をつくることや板書を写真に撮って共有することで教師の学びになる。 ○発問に対する児童の考えの予想をもっとしっかりともっておく必要がある。 ○発問に対する児童の発言をいかした切り返しの発問をできるようにしたい。 ○すべての学年で、道徳の授業を交換し学年のすべての教員がすべて学級で授業をできるように計画的に進める。
		道徳科の教材、評価に関する研究を行い、資料の整備・交流に努めた。	B					
		道徳科の時間を公開するなど、保護者や地域との連携も視野に入れて道徳教育に取り組んだ。	B					
	体力づくり	たくましい心と体を育てる魅力ある授業の工夫改善に努めた。	B	B	B	○体を動かす気持ちよさを体験させ、進んで体を動かそうとする意欲の育成 ○体育の授業公開や0JT研修により、授業改善につながった。 ○体育の宿題や学習の中で体力向上を目指して取り組むことができた。 ▲行事などで体育館や運動場が取れず、学習すべき運動が習得できない。 ▲体育の宿題の定着や休み時間の過ごし方において、積極的に取り組んでいる子とそうでない子の差が大きい。 ▲苦手な子どもへの支援が難しい。	◇なわとびや持久走の強化期間を設けたりして，体力作りにつながる働きかけが行われていることは好感が持てる。 ◇子どもの体力低下が懸念される。体を動かすことの気持ちよさを多く体験させたい。 壺笠山でのハイキングなどが実施できるとよい。 ◇放課後の外遊びの機会が減っているので、学校で体を動かしていることはありがたい。体育の宿題はマンネリ化が課題。トレーニング動画やダンス動画もよいのではないか。	○チャレンジランキング等の校内ランキングをメタモジか掲示板等で共有できるようにすると、さらに取り組み意欲がわいてくるので導入を検討する。 ○運動に意欲がある子どもとそうでない子どもの二極化に対して、そうした状況をなかなか改善できていない。運動や体を動かすことの楽しさに気づかせる授業づくりや校内での取り組みを考えていきたい。 ○逆上がり週間やマット週間など、子どもたちができたを実感できる取組みを検討する。 ○休み時間の時に外遊びへの働きかけを行っていく。 ○今年度、学校全体の取組（縄跳び、行間マラソン、５分間シャトルランなど）をたくさん実施しているので、全校みんなにもう少し啓発し、各担任が意識して取り組みに参加する。 ○体育の宿題をタブレットを活用して取り組むなど、子どもたちが意欲的に取り組める方法を工夫する。
		「体育の宿題」、チャレンジランキングなど、運動に親しむ環境づくりや体力づくりを推進する運動実践に努めた。	B					
		体を動かす気持ちよさを体験させ、進んで体を動かそうとする意欲の育成に努めた。	B					
	指導改善（組織的・計画的）	指導体制・指導方法の工夫改善に努め、学力向上を目指した。	A	B	A	○学力向上に向けた指導体制・指導方法の工夫改善に努めることができた。 ○0JTの積極的な取り組み計画を立て、自己研鑽のために参加する教員が多い。 ○学校行事や校務運営に関して過度の負担がないように改善されている。 ▲0JTの研修が多く、若手は絶対参加だが教材研究の時間が少ない。 ▲会議の時間が長い。 ▲教師の校務分掌について、負担が1箇所に集中する。	◇専科指導教員が2名配置され、高学年では教科担任制を導入して指導の工夫改善への意識と実践がなされていて評価すべき点ととらえられる。教材研究も深まり、複数クラスで実践できるので効果的である。 ◇働き方改革で数値化できるのものは極力共有し、実感できるようにしていく。教職員の心と体が健全であることがすべての大前提であると思う。	○２学期中盤ごろからは行事が続き、かなりタイトあったため、計画段階で行事や取組みを分散する。 ○eライブラリーに取り組ませる際は、教師が事前に教材を指定し出題することで学習効果は高まる。児童に学習の様々な場面でＦｏｒｍｓを使用し振り返りや意見を集約することに取り組んでいく。 ○授業力向上のために「授業を見る」「授業を見せる」ことが大事である。1人１授業をするや「この期間は気軽に見に来てください。」など授業を見合う機会を増やしていけるとよい。 ○どの職員も、国や自治体の方針を理解した上で自己研鑽しようとする必要がある。学校として共通理解を図る会議や研修を行ってはどうか。また、それぞれが組織の方針や時代の変化に合わせた流れを受け入れる姿勢を持つことが必要。 ○どんな力を子どもたちにどのようにして身につけられるようにするか、また、どのような運動に繋げていくのかなど、指導要領を適宜確認して学習を計画していく。 ○各学年の発達段階に合わせた話型やノート指導が統一できると深い学びへの土台が築けるので取組を進める。 ○タイピング練習では、タイミングや方法が学年・学級によって違いがあるのが気になる。一定の枠組みを作っていく。 ○他の学年の教育活動やその特徴についてなかなか知ることができていない。 他の学年の取り組みにも目を向けていきたい。 ○働き方改革を意識し過ぎて、合理的であることが教育活動の中心になっている場合がある。自身が無駄な時間外勤務を減らし、同僚を巻き込まない努力をしなければならないが、お互いの相手の時間を大切に尊重する風土も必要だと思う。 ○働き方改革については、何かを減らしたり無くしたりするばかりではなく、効率よく且つ質を高めていけるような方法を取り入れることを意識して行う。
		学校全体として指導力・教育力の向上を目指し、職員研修に努めた。	B					
		働き方改革や教育活動の質の改善に向け、計画的な準備・役割分担・ICT活用などの取組に努めた。	B					

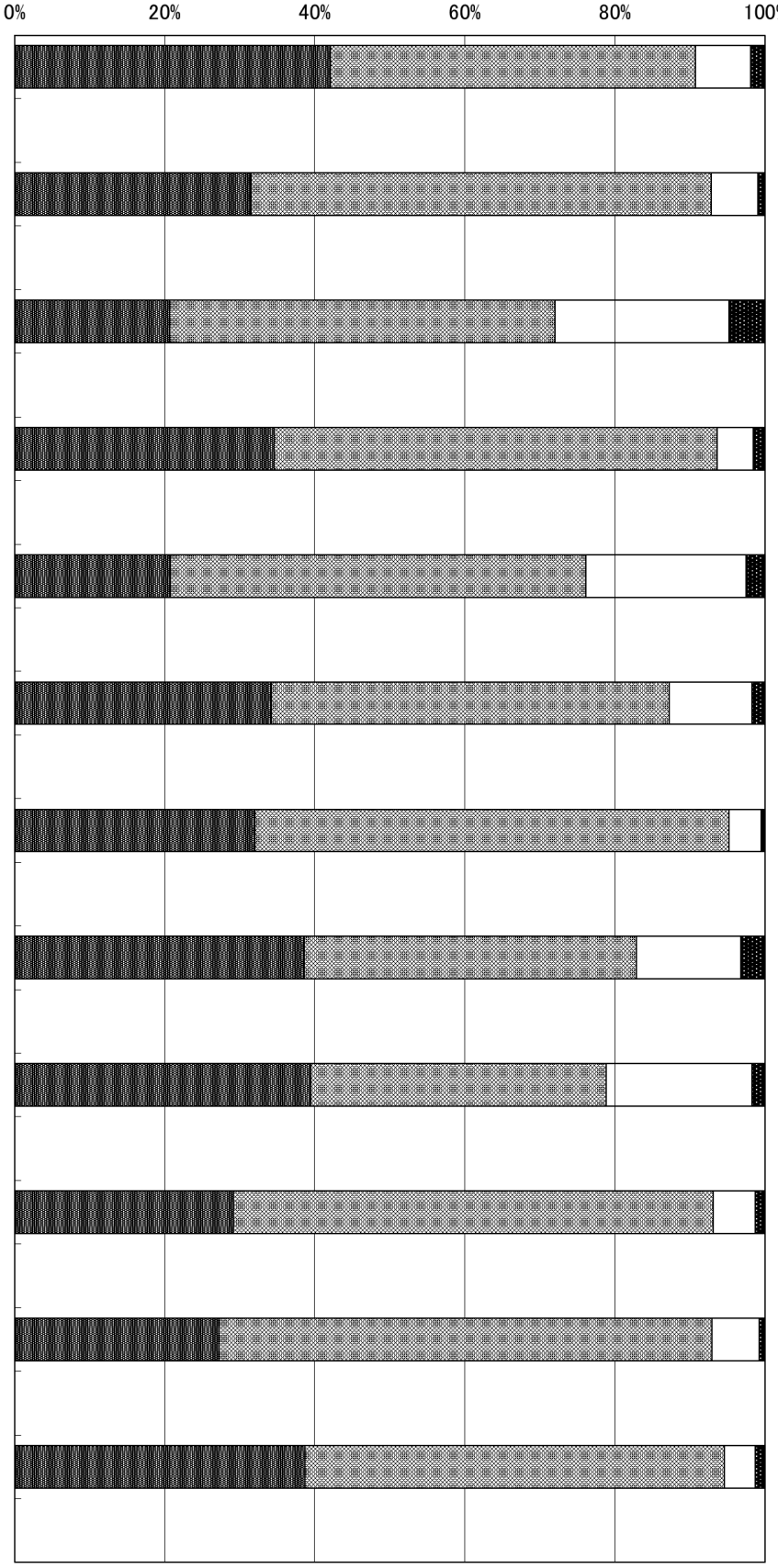
育ちと学びを支える連携	家庭・地域との連携・協働	保護者との個別相談や必要に応じて関係機関との連携を図り、子育てに対する積極的な支援に努めた。	A	B	A	○学級通信を定期的に配信することで、子どもの普段の様子を見てもらい家庭との連携が取れた。 ○保護者との連携は丁寧に行われ、情報発信もこまめに内容を精選して行われている。 ○不登校児童のお家の方と積極的につながり、週一回の登校ができるなど改善につながった例が多く見られた。 ▲話したい保護者と顔を合わせて話す機会が少なかったので、参観や懇談会の見直しが必要である。	◇テトルやHPを使った学校情報の発信に努めている。地域や保護者に学校の情報を伝えることで理解もより深まり、学校への信頼や安全につながると考える。 ◇テトルの学年学級通信配信などで，子どもの様子を知らせてもらえることは大変ありがたい。 ◇学校でのイベント（50周年記念行事等）が地域に伝わるようにできるとよい。	○学級や学年によってtetoru配信の頻度が異なるため、少なくとも学年内ではtetoru配信の頻度をそろえる方がよいのではないかと思う。 ○学年だよりなど、保護者向けにtetoru配信する文書は、基本スマートフォンで読まれることを意識して、拡大しなくでも読める文字のサイズで作成する必要があるのではないかと思う。 ○学校で感じた細かな部分まで保護者に伝えきれていない。 電話や訪宅を積極的に行い、子どもの様子を細やかに伝えていきたい。 ○学校との連携が積極的でない保護者へのアプローチが不十分だった ○児童の様子をより詳しく伝える機会を増やせるように、普段から写真を撮ったり記録を残したりする。 ○保健指導の参観で、もっとこういう機会があったら参加したいという声がいくつかあったので、家庭でも考えてほしいような内容の授業は参観可能にできるとよい。 ○学校方針や教育活動の説明機会を増やしていく。
		保護者・地域との交流や情報発信、参観、懇談会の実施や地域人材の活用に努めた。	A					
		家庭・地域と連携しながら、防犯・防災教育の推進､感染症対策の推進を図るため、メール配信やホームページなどを活用して情報発信をし、安心・安全な学校づくりに努めた。	B					
	保幼小中の連携	保幼小中の連続性を意識し、子どもの校種間交流や教師の出前授業などの具体的な連携に努めた。	C	B	B	○合同OJTとして校内研究を見合うなど小中で積極的に交流できた。 ○唐教研に参加し、保幼中の取り組みを知ることができた。 ○担当の先生を中心に連携が図られ、情報共有が進んだ。 ○保幼小連絡会で児童の入学前の様子を伺い、連携ができた。 ○普段から密な連絡を取り合っている。 ○幼小交流で1年生が成長できた。 ▲唐教研では、部会ごとの活動が難しい。取り組み方法の検討が必要。	◇成長や学びを支える側である保幼小中が、連携し交流を深めることは意義がある。連携強化に期待したい。 ◇唐崎小は、幼稚園と中学校の中間に位置し、交流しやすい。交流イベントなどができるとよい。 ◇地域性を生かした連携、唐教研を生かした連携を進めていただきたい。	○多くの園児が入学してくる園については、学年末に園に実際訪問し、園児の様子を見に行くことで１年生の学級編成にも役立てる。 ○唐教研はもう少し必然性のあるテーマについて話し合いたい。 ○連携していることをそこに該当している先生たちには伝えているが、全体へのフィードバックがなかなかできていない。唐崎は一小一中である為、担当だけでなく各教員が主体的に保幼小中特支の連携を心掛けていくようにする。
		唐崎人権教育研究会（唐教研）など、保幼小・小中の校種の枠を超えた合同研修会を実施した。また、保幼小連絡会、小中連絡会、体験入学の際など、校種間の授業公開に努めた。	B					
		保幼小連絡会、小中連絡会、体験入学の際など、校種間の円滑な接続に向け、教育内容、効果的な支援などについての交流に努めた。	B					
組織体制の充実	生徒指導体制の充実	日ごろから子どもとの関わりを意識的に高め、子どもが気軽に相談できる雰囲気づくりなど、諸課題の早期発見、日常的な予防指導に努めた。	A	A	A	○全校で統一した相談の機会を設けた。 ○学校全体で子どもたちと向き合い、早期解決に繋がった。 ○担当の先生方がフットワーク軽く動き、情報共有がスムーズ。 ○日常的に多くの教員が子どもたちの様子を見守り、情報交換や関係機関との連携を密に行った。 ○生徒指導事案が発生したとき、チームとして協力体制が作られた。 ○児童の事案や課題、トラブルなどを基に再発防止や未然防止の手立てを作成・発信した。 ▲気軽に相談できる体制の検討が必要。 ▲トラブルの未然防止が難しい。	◇子どもたちが互いを認め尊重できる集団が理想で望まれるものであるが、現実はそのようにうまくいかない。ただ、そのような意識が醸成されていくよう、機会のある度に働きかけていくことが大切である。 ◇問題の対応に，組織として取り組んだことは適切で評価できる。 ◇いじめは解決策の検討も大事だが、未然防止が一番重要だと思う。不登校の問題も引き続き支援をお願いしたい。 ◇朝の正門前での声かけ、安全指導など学校に行きにくい子にもよく対応していただきありがたい。小さな事でも、問題があれば連絡があるのはよい。 ◇あいさつ運動の取組の成果が少し出てきた様子が見られる。	◎「あいさつ」「そうじ」「聴く」を大切に。学習規律の確立をめざす。 ○あいさつを大切にしているので、先生方のあいさつも高めたい。下校時の見守りも、当番制で行うなど取組を工夫していく。 ○いじめ事案の報告システムや教師の捉えについては、一定の成果が見られているが、未然防止の観点から「いじめをしない子に育つ」ためにどういう手立てをしていくかをかんがえていかないといけないと思う。ただし、新しく何かするということではなく、既存のものを捉え方を変えてうまく活用するなど。 ○学年間だけでなく他学年とも情報交換に努めていく。 ○未然防止の為の対応と発達支持的生徒指導をより具体時に児童に関わる教員･保護者が連携していける形を考えていきたい。これと併せ、生徒指導と学力の問題は大きな関わりがあるのでその両輪の連携も大切に取り組みたい。 ○校内では様々な生徒指導上のトラブルがおこるため、その都度全校で学級指導をおこなっている。掲示板に指導内容が記載されているが、メタモジにも指導する内容だけを簡潔にまとめ記載することで、それをみながら担任が話せるようにしていけるとよい。（もうすでにスライドや写真は掲載してもらっていると思います） ○規則正しい生活習慣の確立を目指す取り組みを行う。
		問題行動や不登校などの課題に対して、学年・担当と共に組織的な指導・支援ができた。	A					
		あいさつ運動、子どもくらしのやくそく、いじめ対応など、家庭・地域・関係機関との連携による指導に努めた。	A					
	特別支援教育の充実	支援を要する児童の個別の指導計画を作成・活用し、支援に努めた。	A	B	A	○特別支援教育コーディネーターを中心に組織的・効果的な対応ができている。 ○保護者との連携が密に取れた。 ○多くの体験入学を受け入れ、支援学級に入級する園児の検討機会を設けた。 ○SC、SSWなどが計画的に児童や保護者と丁寧にかかわった。 ▲一クラス当たりの人数が多く、個別の支援計画を十分活用できない。 ▲研修内容の改善が必要。支援の目標設定に懸念。指導枠に限りがあるため、検討が必要。 ▲場当たり的な対応になっている場面がある。	◇支援を必要とする子が多く、支援の必要な子どもたちへの教育体制が手厚く整えられていると感じた。個別の指導計画作成に保護者の関わる段階を経ており、保護者の理解と納得のもとに教育活動が展開されていると評価できる。 ◇学級担任、特別支援学級担任のコミュニケーションをさらに深め、児童一人一人に寄り添ったきめ細かい対応を今後もお願いしたい。	○4月から支援級の保護者の方とも連絡をとり、児童理解がもう少し早くにできるとよかった。 ○①集団全体への指導支援②個に応じた指導支援③個別の場における指導支援というステップを踏んで計画的に支援していけるような体制作りが必要。支援の枠には限りがある為、支援が必要な児童についてどの段階にあるのかを把握し、専門機関に繋ぐ前に校内でも話し合うなどしてアセスメントしていけると良い。 ○特別支援に関わる人員と管理職が揃って、定期的にショートの会議をするような委員会が必要である。 ○学級担任となかよし担任のコミュニケーションをさらに深めていく必要がある。 ○指導計画の作成の際に、どのような支援が必要か、学年で相談して考えるなど、担任の先生が一人で抱えこまないようにしていく。 ○専門的な知識を参考にしつつ、手立ての長短両面を念頭に置いて、長期的な視野を持って各ケースの対応を決めていく習慣を身に付けたい。
		組織的・計画的な特別支援教育の体制づくりに努めた。	B					
		巡回相談などを活用し、関係機関と連携した相談体制の充実に努めた。	B					

評定（達成度）の目安　A(目標を上回る達成)：９５％以上　B（目標を達成または概ね達成）：８０％以上　９５％未満　C（目標を達成せず）：５０％以上　８０％未満　D（目標を大きく達成せず）：５０％未満

児童アンケート3456年集計



保護者アンケート集計



1　子どもは、たのしく学校に行っている。

2　学校は、子どもの学習内容が身につくよう、わかりやすく指導している。

3　子どもは、自分で考え工夫しながら宿題などの家庭学習に取り組んでいる。

4　学校は、子どもの間違った行動について、適切に指導している。

5　子どもは、学校や地域や家庭で、進んであいさつしている。

6　学校は、子どものことについて相談できる。

7　子どもは、思いやりの心を持って行動している。

8　子どもは、早寝早起きなど規則正しい生活をしている。

9　子どもは、運動に親しみ、体をよく動かしている。

10 学校は、いじめ等がない学級づくりに努めている。

１１ 学校は、PTAや地域団体と連携し、子どもの安全を守る学校になっている。

12学校は、学校だよりやホームページ、各種便りなどを通して、学校に関する情報をわかりやすく伝えている。

■よくあてはまる　▩だいたいあてはまる　□あまりあてはまらない　■あてはまらない